

松が谷高校の生徒の皆さんへ ー校長メッセージー（7）（8月7日）

「寛容さ」について

生徒の皆さん、おはようございます。校長の博田です。今まで経験したこともないような状況の中、今日、第1学期の終業式を迎えることになりました。明日から始まる夏季休業を前に、今日は私が最近改めて読んだ本についてお話ししたいと考えています。

皆さんは、『君たちはどう生きるか』というタイトルの本を知っていますか？ これは、数年前からまた話題になっている本で、文庫のほかに漫画版も本屋さんの店頭と並んでいくベストセラーですので、皆さんの中にも読んだ人が多いのではないかと思います。

この本は、今から80年以上も前の1937年（昭和12年）に編集者、児童文学者の吉野源三郎という人が書いたものです。15歳の少年コペル君という主人公が、その若い叔父さんとの対話の中で、ものも見方や人間の結びつき、真実の極め方や貧困、権力や人間の弱さ、過ちや寛容さなどについて考察し、成長して行く物語です。

私がこの本を読んでみて、改めて重要であると思ったのは、「人間、思っているだけではダメで、行動を起こすには、実は相当の勇気が必要なこと」、また「自分の行動を自分で決めるとき、失敗を恐れないこと、そして失敗を許す寛容さと反省が大切であること」ということです。ここで特に私が注目したのは、この「寛容さ」ということについてです。

「寛容」とは、辞書を引くと、「心が広くて、よく人の言動を受け入れること。他者の罪や欠点などをきびしく責めないこと。」とあります。英語では、toleranceといいます。

今、日本の社会は新型コロナウイルスの感染拡大の中、「不寛容」な時代にあると言われています。すなわち、「他人への視線や配慮に欠け、もっぱら自分の主張ばかり言うだけ言って、相手の話に耳を貸そうとはしないという姿勢が社会にみられる」ということです。

さきほどの『君たちはどう生きるか』という本に戻ると、主人公のコペル君という少年は、親友たちがいじめられている場面で見えて見ぬふりをしてしまったあと、頭の中であれこれと言い訳をして自分の行動を正当化しようとしていました。深く思い悩んだ挙句、叔父さんのアドバイスでその親友に自分の正直な気持ちと謝罪を伝える手紙を書き、結果的にはその親友から「あんなこと、君、いいんだよ。僕たち何とも思ってやしないよ」という寛容な言葉をもらいました。これは、この主人公の少年が真剣に自分の行動を反省したからこそ、それが親友にも伝わって、「いいんだよ」という言葉につながったのだと私は感じました。

この「いいんだよ」という魔法の言葉こそ、寛容の精神を表す最たるものではないでしょうか。それは、仲間を励まし、褒めることを言葉で伝えたり、心を広く持って人の言葉や行動を受け入れることです。現在のコロナ禍といわれるこういう時代だからこそ、私が皆さんに望むのは、まず周囲の人に対して「いいんだよ」の気持ちを持つことです。この寛容な気持ちが、松が谷高校の目指す学校の一つ、「自分の大切さとともに他の人をも大切に作る気持ちを育む学校」というフレーズにも通じると思います。

最後になりましたが、明日から始まる今年の夏季休業は2週間あまりと短く、感染予防のために外出もままならず緊張の続く日々ですが、今日お話しした「寛容さ」を持って人に接して有意義に過ごし、第2学期を迎える準備をしてください。

以上で私の話を終わります。夏季休業後に、元気な顔の皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

令和2年8月7日
都立松が谷高等学校長 博田 英明